

# 映画『男はつらいよ』にみる活版印刷

滝口富夫

## 『男はつらいよ』の「朝日印刷」

松竹映画『男はつらいよ』は昭和四十四（一九六九）年八月の第一作から平成九（一九九七）年の第四十八作までつづいたシリーズで、主人公寅次郎役の渥美清の死去によって幕を閉じた。「フーテンの寅」という二つ名を持つ寅次郎は、みんなからは「寅さん」と呼ばれ、自らは渡世人と称して日本全国を巡り、テキ屋稼業をしている。時にふるさと葛飾柴又にある実家で「とらや」という団子屋に戻って来ては、一騒動起こすという喜劇映画である。その騒動は概ね「寅さん」が有名女優を配されるヒロインに失恋して、また商売の旅に出る、というほぼ決まったパターンとなっている。同一シリーズとしては最も回数が多いと

いう理由でギネスブックに登録されているらしい。

さて、見出しに掲げた「朝日印刷」は、この映画に登場する印刷所のことである。この名称については後述する。

映画の中では、「とらや」の裏庭と木戸で接している。そして「寅さん」の妹でさくらの夫である、諏訪博がこの印刷所を牽引する中心工具であること、通称「タコ社長」と呼ばれる桂梅太郎も「とらや」と昵懇の間柄で裏庭の木戸を頻繁に行き来する。どちらかというタコ社長が「とらや」に立ち寄ることの方が多いのだが、まれに「朝日印刷」の内部が映るシーンがある。そこには筆者には懐しい活版印刷の工場が登場するのである。

本稿は書籍編集者を長年勤めている筆者がこの『男はつらいよ』に出てくる活版印刷所のシーンから読みとれるも

のを明らかにし、この映画が印刷業界と出版業界に与えた影響の一端を考察するものである。まず印刷所内部が映されるシーンを以下に挙げる。

作品No	① 公開年月	② サブタイトル	③ 印刷所シーン	第16作	① '75年12月	② 『葛飾立志篇』	③ 場面無し
第1作	① '69年8月	② サブタイトルなし	③ 52分頃	第17作	① '76年7月	② 『寅次郎夕焼け小焼け』	③ 場面無し
第2作	① '69年11月	② 『続』	③ 場面無し	第18作	① '76年12月	② 『寅次郎純情詩集』	③ 14分頃
第3作	① '70年1月	② 『フーテンの寅』	③ 場面無し	第19作	① '77年8月	② 『寅次郎と殿様』	③ 1時間7分頃
第4作	① '70年2月	② 『新』	③ 場面無し	第20作	① '77年12月	② 『寅次郎頑張れ!』	③ 場面無し
第5作	① '70年8月	② 『望郷篇』	③ 14分34秒	第21作	① '78年8月	② 『寅次郎わが道をゆく』	③ 1時間8分頃
第6作	① '71年1月	② 『純情篇』	③ 28分頃	第22作	① '78年12月	② 『噂の寅次郎』	③ 39分頃
第7作	① '71年4月	② 『奮闘篇』	③ 場面無し	第23作	① '79年8月	② 『翔んでる寅次郎』	③ 58分頃
第8作	③ 16分頃・49分頃・50分頃に工場の事務所のみ			第24作	① '79年12月	② 『寅次郎春の夢』	③ 39分頃
第9作	① '72年8月	② 『柴又慕情』	③ 1時間12分頃	第25作	① '80年8月	② 『寅次郎ハイビスカスの花』	③ 1時間31分頃
第10作	① '72年12月	② 『寅次郎夢枕』	③ 10分頃	第26作	① '80年12月	② 『寅次郎かもめ歌』	③ 場面無し
第11作	① '73年8月	② 『寅次郎忘れな草』	③ 場面無し	第27作	① '81年8月	② 『浪花の恋の寅次郎』	③ 13分頃
第12作	① '73年12月	② 『私の寅さん』	③ 12分頃	第28作	① '81年12月	② 『寅次郎紙風船』	③ 1時間目頃
第13作	① '74年8月	② 『寅次郎恋やつれ』	③ 14分頃	第29作	① '82年8月	② 『寅次郎あじさいの恋』	③ 場面無し
第14作	① '74年12月	② 『寅次郎子守唄』	③ 9分頃・32分頃	第30作	① '82年12月	② 『花も嵐も寅次郎』	③ 57分頃
第15作	① '75年8月	② 『寅次郎相合い傘』	③ 47分頃	第31作	① '83年8月	② 『旅と女と寅次郎』	

第32作 ①'83年12月 ②『口笛を吹く寅次郎』 ③11分頃  
④1時間20分頃

本稿では、表題に記したように活版印刷の考察であるので第3

十二作までの一覧にとどめた。

取り上げた32作の内、印刷所内部のシーンがあるのは、24作、印刷所の場面が無いのは8作である。これらの場面の映像時間は、おおよそ20秒内外であるが、実に正確に印刷所の内部を映している。筆者の見立では、実在の印刷所でのロケであろうと類推する。そしておそらく同規模の印刷所が二つ、あるいは三つが種々の事情で使い分けられていると思われる\*。

まず活版印刷が終焉を迎える大きな節目が描かれている第32作に目を向けてみることにする。

### 活版から平版へ

冒頭7分目前後のシーンである。

●「とらや」店内

買い物から帰ってきたさくら。その姿をみて駆け寄るおばちゃん。

おばちゃん「さくらちゃん、大変だよ。ひろさんと社

長が喧嘩したらしいんだよ」

さくら「え…?」

●「とらや」帳場

おいちゃんとひろしがいる。そこへさくらが入ってくる。

さくら「(博に) どうしたの?」

おいちゃん「社長がな、儲けにならない仕事ばかり持ち込むって、博さん怒ってんだよ」

博「要するに古いお得意にしがみついているだけなんだよ、社長の営業のやり方は。そういうお得意なのは、儲かる仕事は大きな工場に出しておいて、手間ばかりかかってどこにも引き受け手のないような仕事をウチに押しつけてくるんだ。今日だってそうなんだ。急ぎの仕事だから割り込ませてくれて、冗談じゃないってんだよ。最初から赤字だってわかってる仕事なんだからな」

さくら「そう腹をたてないで。いい機会なんだから最初から話し合ってみたら? 根本的なことを」

おいちゃん「あいつは少し博さんに甘えてんだから。この際、きつく言った方がいいぞ。あつ来た来た」

タコ社長、紙の束を左手に持って印刷所から裏庭を通じてやってくる。

タコ社長「博さん、さつきは悪かった。俺の言い過ぎがあつたら謝るから、この仕事だけは、やってくれよ……今日中にしますって専務に約束しちゃったんだ。な、このとおり、(博に頭を下げる。)」

博「今まで何辺言われたかな、そういう無茶を。段取りがみいんなムダだ。(中略) 長期的な展望つてものがまったくないんですからねえ(中略)」

タコ社長「分かったよ。どうせ俺は無能な経営者だよ。止めますよ。止めりゃあいいんだろ。何もやりたくてあんな工場やつてるんじゃないんだよ、みんな叩き売って借金払った残りは退職金としてみんなくれてやるよ。俺は一文無しになって、鞆下げで、寅さんみたいにフリーテンして歩くんだよ」

タコ社長はこう言い捨てて工場に戻って文選を始める。ここに「無茶」「段取り」「長期的な展望」などの言葉が示すように、印刷所の仕事が生産率化を目指すような時代になってきたことが示されている。そして、「朝日印刷」も「長期的展望」を一手を打つ。この作の最後のシーンをみてみよう。

### ●博の家の居間

新年。博の家に届いたパソコン。満男、驚く。

満男「これうちでもらったの、工場こうばのもんじゃないの？」  
さくら「社長さんのプレゼントなの」

満男「へえ、どうして？」

タコ社長「あのね、満男君。博さんが大事なお父さんの遺産をみんな投資してくれて、お陰で、オジサンの工場こうばは「オフセット」を買えたんだよ。だから、パソコンの1台ぐらい安いもんだよ。だってそうだろう。その金がなきゃあさ、俺は今頃首くびを括くって死んでたかもしれないんだよ。いまじゃあ、笑い話になるけどさあ、去年の10月の給料日……」

タコ社長は泣き出す。この場面は「朝日印刷」の新年会を博の自宅で行うところで社員が集まる前のシーン。博のおかげでタコ社長は、明るい正月の一日を過ごすことができたのである。

この作は一九八三(昭和58)年12月に公開された。印刷業界が活版印刷から平版「オフセット」印刷に切り替わる移行期である。オフセット印刷は二十世紀初頭にアメリカ人のルーベルによって発明され、日本にも伝わっていたが、日本経済新聞が日経アネックスとして一九七八年三月から全頁、活字組版から電算植字に変え、印刷も活版印刷からオフセット印刷に切り替えた前後からこの切り替えが

加速した。これは、印刷業界と出版業界に大きな変革をもたらした。この二つの印刷方式の違いは、活字を使った組版から、C T S (Computerized TypeSetting) と総称される電算写植などの組版システムに変わった事と、印刷機が活版印刷機から平版印刷機に変わったことである。つまり活版印刷のシステムを捨てる事になるのだ。多くの会社は、一時的に両方のシステムを併存していた。この変化には、莫大な資金がかかった。写研の組版システムは1セット六千万円ほどもしたそうだ。これに印刷機・製版機も新たに購入しなければオフセット印刷には切り替わらない。印刷業界のこの時期の変化に関しては、『活字が消えた日』(晶文社刊、一九九四年)をはじめとする中西秀彦の一連の著作に詳しい。そして、この時期には零細な印刷所であるタイプ印刷・端物屋はものやと呼ばれる函バリや本の扉を専門に印刷する規模の印刷所の多くが廃業を迫られた。しかしこの改革を、「組版システムにコンピュータを入れたこと」という視点から見ると終わったのではなく、この時期から現在の電子書籍作成にまで30年も続く、大変革のはじまりと言つて過言ではない。活版印刷の終焉というのは、文化史的な大問題なので、ここまでを本稿の考察対象とした次第である。では、これらのシーンから見てとれる「朝日印刷」の

設備とはどのようなものであるかみていくこととする。

### 「朝日印刷」の設備

**印刷機** 通称パタパタと呼ばれるアオリ式活版印刷機が2台、もしくは3台。作によってその配置が異なつて見えることが、同一のセットではないと考える所以である。パタパタというのは、用紙が印刷されると、団扇の骨組みのような器具で、裏返しにして重ねていく旧型の印刷機である。サイズは菊半裁判が一台と、それより小さいものが一台。印刷機で菊半裁判というのは、A4判のコピー用紙を縦二枚横二枚に並べた大きさよりやや大きい用紙のこと。本誌(『大衆文化』)の8頁分が一度に刷れる大きさのもの。

**活字の馬** 活字が配置されており、ここで文選をする。精興社青梅工場を取材して発行された『活版印刷技術調査報告書』(青梅市教育委員会発行、森啓著、平成16年)などには「スタレケース」と記されているもの。

**植字台** 文選工が拾つて活字ケースに入れた活字を組み付ける場所。ここには、句読点、カッコ類、行間を埋めるインテル、罫線、字間を空けるクワタなどの、いわゆる文字ではない活字がある。植字工は文選工が拾わない活字を含めて組版作業を行なう。

棚にささったゲラ箱 植字工が、たこ糸で締め付けて組み上げた一頁分を入れておく箱。

筆者の目から見て、ほぼ正確な印刷所内部が再現（先に記したように、実際の印刷所である可能性が高い）され、役者たちの印刷工としての動きに、大きな違和感はなく丁寧な作りと評価出来る。ほんの20秒ほどのシーンであるからと思うかも知れないが、どのような短いシーンでも、あり得ない動作が入る作品もある。たとえば、松竹映画『鬼畜』で、主人公を演じる緒方拳がピンセットを使って文選しているがこれはありえない。そして、文選するのにピンセットを使うのは、宮沢賢治『銀河鉄道の夜』の「活版所」の影響があることを指摘して、何故、宮沢賢治がこのような記述をしたのかという論考を纏めたことがある。（拙稿「文学に現れた印刷シーン」『印刷雑誌』、二〇〇三年三月〜二〇〇五年三月）

この映画の中でも第12作に、ゲラ箱の上に、活字箱をのせ、右手にピンセットを持ち、活字をつまんで博に渡す印刷工が出てくるシーンがある。植字台の方から出て来た工員が「餞別」といっておどけて渡すので、判断のしようがないのだが、仕事上ではありえない。

また、第8作では、刷り上がったばかりのチラシで鼻を

かんだ寅さんの顔に、赤黒二色のインクがついて笑われる場面がある。この印刷所の印刷機は単色機であるから、このようなインクの付き方には、多少疑問がのこる。一色目を刷った後、ある程度インクが渴いてから、次の色のインクを刷るから、二色同時に付くことは考えにくい。しかし、この映画が喜劇映画であることを考えれば、ただの難癖でしかないだろう。実際の印刷工場の作業を丁寧に再現していることはまちがいない。

### 「朝日印刷」の業務内容

さて、この映画で映らない設備は、活字鑄造機・断裁機・用紙置き場である。

活字鑄造機がなくても活字は組める。その場合、使用した活字を活字ケースに戻す行程が必要になる。生産性は落ちる。この映画が上映された時期とこの映画の時代は基本的に同時代であるので、昭和40年代以降で、活字を戻しているとするなら、文字組版が主体の印刷所ではないと考えられる。「朝日印刷」は書籍などを印刷する会社ではなく、チラシ・ポスター・伝票類などの商業印刷が主体の印刷所と断定出来る。実際この映画の中で以下のような会話や場面が出てくる。

先ほどの第8作で寅さんが顔を汚す場面では

●「朝日印刷」工場内

数名の工員が働くなか、寅次郎が入ってくる。

寅次郎「よう、労働者諸君！ 折からのドルシヨックにもめげず、今日も勤労に従事しますか。ご苦労さん」

寅次郎、印刷機から刷り上がったチラシを取り出して目をやる。

寅次郎「はあア、秋のお楽しみセールか。大変だねえ、えっ？」

博「兄さん、お帰りなさい。」

寅次郎「よお」

博「しばらくでしたね」

寅次郎「そうなんだよなあ。どうしてこう素直なあいさつが出ねえのかねえ、あいつら」

博「どうかしたんですか？」

寅次郎「え？ 聞いてくださいよってんだ（チラシで鼻をかむ）」

チラシから顔をあげた寅次郎を見て、大笑いする工員たち。

寅次郎「なんだい、なに笑ってんだい、てめえら。いいじゃねえか。てめえら」

寅次郎の顔には赤と黒のインクがべったりと顔についている。

第11作では

●「とらや」の裏口

さくら「今日も残業？」

博「そうだなあ、丸三スーパーの急ぎのチラシがあるから」

第24作では、博が小岩のキャバレーにポスターとチラシを納品するために小脇に抱えて登場する場面がある。

この画面に映るチラシはA4判。ポスターは電信柱に張るのか縦長、B5判3面分（横二五七ミリ×縦四四四ミリ相当）と思われる。ともに、クラフト紙に包まれ、その上に、一枚見本を貼り付けている。見た目では二五〇枚包み。納品の際の常道である。ヒロシはヘルメットを持っているので、バイクに乗って納品に行く。ポスターは黄色と赤の2色。見える部分から類推して「「ホステス」さん募集」のようで、「朝日印刷」は柴又近辺のチラシなどを中心とした商業印刷の印刷所であると判断してまちがいない。

断裁機が見えないのは疑問である。印刷物は仕上がりサイズより大きい用紙に印刷して、断裁機で仕上がり寸法に

裁ち落とす作業が必要だからである。先に触れた納品されたチラシやポスターはトンボと呼ばれる目印で仕上がりがサイズに断裁されていなくてはならない。断裁機は映画には映らない場所にあると考えるところ。

このような設備で商業印刷を行っているとなると、「朝日印刷」の従業員の人数は概して多いと思われる。タコ社長と博を除いて初期には六、七人、のちには女性事務員を含む四、五人の従業員を抱えている。しかも従業員に住み込みを許している。タコ社長が常に金策を強いられたり「中小企業の経営者の苦勞」を口にするのは、タコ社長の従業員に対する温情が仇をなしていると言える。

### 「朝日印刷」の名称の変遷

一般に「朝日印刷」と呼ばれ、本稿でもそう記しているが、正式名称ではない。「とらや」の裏庭からは、二階建ての「朝日印刷」の壁が見え、そこに、この印刷所の名称が記されているシーンがしばしば映しだされている。

とくに第1作目は、印刷所の二階に住み込んでいた諏訪博とさくらのロマンスが主要な筋立てであるために、この壁が映るのだが、そこには「共栄印刷 K&K」と壁に直に黒いペンキで描かれ、第4作では「共栄印刷／TEL(657)7530」

第5作は「朝日印刷所／電話(657)3411」と白いペンキで壁に記され、第7作は黒のペンキで「朝日印刷 K&K」とあり、一定しない。第28作で壁に看板として掲げられ「各種印刷／朝日印刷所／電話番号(657)3168」となり、落ち着くようである。それをふまえた上で「朝日印刷」と呼ぶことに大きな問題はないだろう。

ちなみに「とらや」は二階建てであるので、この看板は参道からは見えない。見えるのは「とらや」の裏庭からだけであることを、断っておく。

### 「朝日印刷」の社会的評価

映画の中には、この印刷所に対する評判は一切出てこない。「寅さん」が妹さくらにむかって、「お前の亭主は安月給」といったり、タコ社長が税務署から呼び出しをくったり、金策に苦勞していることは、評判といえない。しかし、「朝日印刷」の評判は映画の中よりも、実は現実の世界において高いのである。

筆者がこのシリーズに興味を持つに至った契機は、東池袋にある上毛印刷会長の大澤拓郎氏から、次のような話を聞いたことであった。



「男はつらいよ」の印刷所の場面は古い。すでに多くの印刷所がオフセットに切り替わっていて、もっと明るく衛生的だ。この人気映画が、古い3Kの職場のイメージをまき散らしているのは、優秀な人材が印刷業界に入って来なくなってしまうので、組合が松竹にイメージを現状に近づけて欲しいという申請をした。

東京印刷工業組合が申し入れをしたのか、相手が本当に松竹なのか、山田洋次監督なのか、それを裏付ける資料を見つけることは今回は出来なかった。しかし別の資料に出会った。

印刷会社と言えば、映画寅さんシリーズ「男はつらいよ」に出てくるタコ社長率いる朝日印刷（最初は協栄印刷）が良くも悪しくも典型的なイメージとして定着している。（「印刷会社のイメージは向上」杉山慶廣「Printers Circle」日本印刷技術協会発行、二〇〇七年七月）

「寅さん」ファンを自称する柳さんが、「寅さんの映画に欠かせない、裏のタコ社長が何故印刷屋なのか」と

問うと、山田監督は「さくらの夫の仕事には印刷が良  
いと思った」と述べた後に、さらに「印刷は文化を担  
う奥深い産業だ」と即答し、会場が大いにわきました。  
〔ほるぶ・あゆみ争議支援―三上満+山田洋次トーク  
ショー〕『全印総連機関誌』（通巻一一四六号）

このように印刷業界は『男はつらいよ』シリーズにはか  
なり敏感に反応していたのである。

#### まとめ

印刷という仕事は構造不況業種に指定されている。指定  
されると低金利でお金の融資が受けられるらしい。あまり  
儲からない業種と行政に認知されている。タコ社長の苦労  
は、この業種全体に今でも通じるものなのであろう。

一九八〇年代以降、多くの印刷所はオフセット印刷機や  
電算写植を購入して設備を一新した。活版印刷システムの  
ままであったら、メンテナンスの費用のみで済んだのだが、  
とんだ散財をせざるを得なかったのだ。多くの印刷所は清  
水の舞台から飛び降りたつもりで、新しいシステムに身銭  
を切った。これだけ、金をかけて、新しい物を買ったのだ  
から、数年間はメンテナンスの費用はかからないと思って

いた。しかし飛び込んだ世界はすべてコンピュータが絡んでくる世界であったことをすぐに思い知らされた。金がかかるのである。コンピュータの世界は日進月歩であるので、プログラムや機材を更新していかなければならないからである。

コンピュータ化した機械というものは、作業を平準化する。活版印刷の時代の熟練工の技術は習得するのに時間がかかったが、コンピュータ化した機械は、だれでも簡単に一定の成果を生み出すことができる。文選を早く正確に行うことが出来るようになるのは、十年やそこらはかかるだろうが、ワープロであるなら、それほどは時間がかからないのは周知のことだ。印刷機もコンピュータによって管理されているので、インクの濃度などの調整、圧力のかけ方も機械が調整してくれるのだ。熟練工の賃金よりは、ワープロ入力の方が若い女子社員の方が、安価におさえられることは容易に理解出来るだろう。

新しい機械も次々出てくる。オフセット印刷では鉛の代わりにフィルムを使うのだが、昔は、一頁毎のフィルムを台紙に貼って版を作っていた。イメージセッターという機械が出現して、一枚の大きなフィルムに頁が自動で配置できるようになった。と思ったら、今ではCTPとよばれる

フィルムを必要としないで、直接レーザー光線で、刷版を焼くことができる機械が出てくる。新たな機械を導入して、その機械の減価償却が済むかすまないうちに次の新しい機械を買わなくてはならない、ということになってしまったのだ。

活版印刷後の印刷業は、こういうことを30年続けているのだ。そして、現在は、電子出版ということになって、印刷をしない本を広めようということになってきて、国も資金を出すそうである。ただ、それは印刷業界に出すのではなく、出版界に出すのである。判断を誤ったり、新しい知識の導入をあきらめた印刷所は、活版印刷がオフセット印刷に切り替わるときと同じような状況におかれてしまうかも知れない。

さて、これからどうなるのだろうか？

文化の発信に欠くことが出来ないのが印刷・出版業界であり、その事が無くなるわけではないので、長く続いていくだろう。しかし電子出版という未来を見すえたとき、組版(プリプレス)は残るが、印刷そのものは不要となる。従来、印刷業界では「組で損して刷りで儲ける」と言われていたが、その刷りが無くなる可能性が高い。

まさに、「印刷所はつらいよ」である。

【注】

※ しかし、二〇二二年二月九日の『毎日新聞』夕刊の東京版に、「山田洋次ミュージアム…東京・葛飾の文化センターに新設へ 寅さん記念館も改装」という記事が掲載され「寅さん記念館では、登場人物の「タコ社長」が経営する「朝日印刷所」のセットを再現。」とあった。現在の印刷所で撮影したのか、撮影用のセットを作ったのかということの検証は、印刷機材の専門家との共同研究が必要であるので、今後の検討課題とせざるを得ない。

(八木書店 出版部)